

日本赤軍及び「よど号」グループの動向

1 日本赤軍の動向

一 活動の沿革

日本赤軍は、マルクス・レーニン主義に基づく日本革命と世界の共産主義化を目的として、国内で警察署の襲撃や、銀行強盗等の凶悪な犯罪を犯した過激派グループの一派が、「国際根拠地論」を打ち出して、海外に革命の根拠地を求めて脱出した後に結成された国際テロ組織です。

重信房子らが、当時、盛んにテロ事件を起こしていた「パレスチナ解放人民戦線（PFLP）」と接触するなどして中東に活動基盤を形成した日本赤軍は、一九七二年（昭和四七年）五月、イスラエル・テルアビブ国際空港（現・ベングリオン空港）で、メンバー三人が自動小銃を乱射するなどし、二十四人死亡させ、七六人に重軽傷を負わせる「テルアビブ・ロッド空港事件」を引き起こし、その後も世界各地で、外国大使館の占拠や航空機のハイジャック等の凶悪な犯罪を引き起こ

しました。特に、一九七五年（五〇年）八月のマレーシア・クアラルンプール所在の米国大使館等を占拠した「クアラルンプール事件」や、一九七七年（五二年）九月のパリ発東京行き日航機をハイジャックした「ダッカ事件」では、我が国政府は、在監・勾留中の日本赤軍メンバー等の釈放を余儀なくされました。

二 相次ぐメンバーの逮捕

警察は、外国治安情報機関等との連携を強化して、世界各地で日本赤軍メンバーに対する懸命な捜査を行い、ルーマニア、ペルー、ボリビア等でメンバーを相次いで検挙しまし



日本赤軍メンバー4人の逮捕・収監
(2000年(平成12年)3月) (共同)

た。また、一九九七年（平成九年）二月には、長年にわたって活動の根拠地としてきたレバノンに潜伏していた日本赤軍メンバー五人が一斉に検挙され、同国への政治亡命が認められた岡本公三を除く四人は、二〇〇〇年（二二年）三月に国外退去処分となり、警察は、帰国と同時に四人を逮捕・収監しました。

三 最高幹部重信房子の逮捕と日本赤軍の解散宣言

レバノンという活動の根拠地を失った日本赤軍は、地理的・文化的に日本に近いアジア地域を、国内における組織固めや国際戦線の新たな戦略上の拠点と位置付けました。こうした中、警察は、二〇〇〇年（二二年）一月、国内に潜伏していた日本赤軍最高幹部重信房子を大阪で逮捕しました。

二〇〇一年（一三年）四月、重信房子は、獄中から、日本赤軍の解散を宣言する声明を発表し、日本赤軍も、同年五月に発出した「五・三〇声明」（「テルアビブ・ロッド空港事件」を記念し、日本赤軍が毎年五月三〇日前後に発出している声明）で、これを追認しま

した。しかし、この解散宣言では、「テルアビブ・ロッド空港事件」を依然として評価しており、また、同年一二月には新組織「連帯」（後に「ムーブメント「連帯」」に改称）を立ち上げ、事実上、日本赤軍の継承組織として活動を開始しています。

四 警察の対応

現在、日本赤軍は、重信房子の逮捕に伴い、組織の建て直しと新たな活動拠点の構築を最優先課題として取り組んでおり、テロ活動を再開する可能性は相対的に低下しているものとみられます。しかし、その一方で、テロ組



我が国が国際手配中の日本赤軍メンバー

織としての性格を依然として堅持しており、その危険性に変化はなく、警察は、逃亡中のメンバー七人の早期発見・逮捕に向けた取り組みを推進しています。

2 「よど号」グループの動向

一 「よど号」ハイジャック事件」と「よど号」グループの動向

「よど号」ハイ

ジャック事件」は、一九七〇年（昭和四五年）三月三十一日、日本刀、鉄パイプ爆弾等で武装した共産主義者同盟赤軍派の活動家九人が、東京発福岡行きの日本航空三五便・通称「よど号」を乗っ取り、乗客一二二人、乗員七人の合計一二九人を人質に取って、同機を北朝鮮に向かわ



福岡空港で日航機「よど号」から降ろされる人質
(1970年(昭和45年)3月) (共同)

せるよう要求し、福岡空港及び韓国^{キン}の金浦^ポ空港において乗員・乗客の一部を解放した後、同年四月三日に北朝鮮^{ミリム}美林飛行場に到着し、北朝鮮当局に投降した事件です。

警察では、これら「よど号」犯人をICPOを通じて国際手配しており、一九八八年（六三年）五月には、不正に入手した旅券を使用して日本に潜伏していた犯人一人を逮捕しました。また二〇〇〇年（平成十二年）三月には、田中義三を逮捕したタイ当局から同人の身柄引渡しを受け、逮捕しました。ハイ

ジャック犯人のリーダー田宮高磨ら二人は、北朝鮮で既に死亡が確認されていることから、現在、北朝鮮に残留しているのは、小西隆裕、赤木志郎、魚本（旧姓安部）公博、若林盛亮、岡本武の五人とみられています（うち一人は死亡したとされているが未確認）。

他方、昭和五〇年代半ばから六〇年代にかけて、欧州で北朝鮮^{ミリム}鮮工作員と接触していた不審な日本人女性六人に対し、海外での活動を抑止し、テロ活動を防止するため、一九八八年（昭和

六三年）八月、外務省は日本旅券の返納を命じました。一九九二年（平成四年）には、これらの女性全員が「よど号」犯人の妻（二人は元妻）であることが判明しました。警察は、元妻を除く返納命令に違反した五人を旅券法違反容疑で国際手配しています。



平壤にて報道機関のインタビューに答える「よど号」犯人
(左から魚本公博、小西隆裕、赤木志郎、若林盛亮)
(2004年(平成16年)9月) (共同)

「よど号」グループは依然として、北朝鮮国内において、当局との密接な関係を基盤に、グループ全員の帰国を目指して、機関紙、インターネット等を通じ、盛んに自己の主張を

訴えています。特に「よど号」犯人は、機関紙等を通じて、全員の早期合意帰国を訴えており、二〇〇四年（一六年）六月には、北朝鮮当局に対し、日本への帰国支援を要請する書簡を送付しました。これに対して、北朝鮮当局は、同年七月、犯人らの帰国には反対しないとの立場を改めて表明するなど、彼らの帰国に向けた動向がみられます。

「よど号」犯人の妻等については、二〇〇三年（一五年）までに、帰国した三人を逮捕し、これに続いて、二〇〇四年（一六年）二月、旅券法違反及び偽名で銀行口座を開設したとして有印私文書偽造・同行使容疑で国際手配中の魚本民子を、同年一〇月には、旅券法違反で国際手配中の田中協子を、帰国と同時に逮捕しています。なお、子女については、現在までに一七人が帰国しています。

二 欧州における日本人拉致容疑事件への関与

二〇〇二年（一四年）三月、警察は、「よど号」犯人の元妻が「北朝鮮の金日成から「代を継いだ革命を実施せよ」との教示を受けたリーダーの田宮高麿の指示で、一九八三年（昭和五八年）、私がロンドン留学中の有本恵子さんに声を掛けて騙し、デンマークのコペンハーゲンで朝鮮労働党のキム・ユーチョル及

び魚本公博に引き合わせ、北朝鮮に連れ出した」旨の証言をしたことを含め、これまでの捜査結果を総合的に検討した結果、「よど号」グループが朝鮮労働党の指導の下、金日成主義に基づいた日本革命を目指して、日本人の拉致に深く関与していたと判断しています。二〇〇二年（平成一四年）九月、警察は、有本恵子さんに対する結婚目的誘拐の容疑で、魚本公博の逮捕状の発付を得て、同人を国際手配しています。

国際手配中のハイジャック犯人

 No. 1 小西 隆 裕 昭19. 7. 28生 身長165cm	 No. 2 若 林 盛 亮 昭22. 2. 26生 身長164cm	 No. 3 赤 木 志 郎 昭22. 11. 4生 身長173cm
 No. 4 岡 本 武 昭20. 7. 17生 身長165cm	 No. 5 魚本(安部)公博 昭23. 3. 19生 身長168cm	昭和45年3月31日 日航機「よど号」を 乗っ取り、北朝鮮 に渡った国外逃亡 犯人です。 警察庁

我が国が国際手配中の「よど号」犯人